

「専業主婦？」は大忙し —たくさんの出会いに導かれて—

原 容 子*

1972年文教育学部史学科卒業の原容子です。まず、簡単な履歴をお示しします。私は72年に卒業し3年近く企業の広報課に務め、退職して75年に結婚して横浜市の日吉という街で暮らし子供3人を育てました。当時の四大卒文系女子の民間会社での就職や仕事については、先程、土屋さんがとてもよく整理して話してくださったので、私からは、仕事を辞めてしまった、少々賞味期限が切れた「クリスマスケーキ」から見た当時の様子をお話したいと思います。

暮らしから始まる活動

しっかりした裏付けがあるわけではなく、私個人が感じた当時の雰囲気のようなものですが、あの頃は女性が仕事を続け、家庭と両立させていく環境はあまり整っていないで、相当な強い意志と努力がなくてはできなかったと思います。私のような軟弱な人間はさっさと辞めてしまったわけですが、一方で家庭にいるいわゆる専業主婦の状況について言えば、夫の収入だけでそこそこに暮らして行かれ、あえて外に働きに出なくてもよいという恵まれた人も多い時代でした。また、周囲も家族も主婦が外に出て活動することに割合寛大だったとも思われます。ですから、家庭にいながらも外に目を向けて活動したいと考えているパワフルな女性が私の周りにはたくさんいました。子供が生まれて、外に連れて出て行くようになると、子育てを通じて色々な母親たちと出

会うようになりました。今で言うママ友ですね。まずは子どもを公園などで一緒に遊ばせることから始め、やがて子供のために無農薬の野菜や安全な肉や牛乳などの安全な食品の共同購入を始めました。子供が学校に入学するとPTAとの関わりが始まり、私は第二子の中学校入学からPTA活動に深く関わりました。当時は活発で力のある女性たちが周りにたくさんいて、一緒にいろいろなことができたのはとても楽しい経験でした。そして、そういう女性たちに学校や地域、あるいは安全な食を目指す生産者が支えられていたのではないかと考えています。

子どもの本の店の運営

ここで紹介したいのが子どもの本の店「ともだち」です。仙台に引っ越すまでの8年間、関わっていました。もともと地域で親しまれてきた子どもの本の専門店ですが、閉店という話が出た時、近くに住む女性たちが手をあげて経営を受け継ぐことになった店です。その時の13人のメンバーに加わったのですが、中には仕事を持っている人も半分近くいて、残りは主婦。本当にいろいろな立場の人が自分のできることに力と時間を出し合って、なんとか週6日間、昼間の6時間だけですが、店を開くことができました。ここで多彩なメンバーと一緒に運営する中では、対立することも随分ありましたが、大変面白い貴重な経験をしたと思います。店の経営は決してうまくいかなかったのですが、子どもたちやお母さんたちにとって、本と出会い、人が集う大切な場となっていました。店内では週に1回、お話の会が開かれて

*1972年 お茶の水女子大学文教育学部史学科卒業

いました。この本屋は今年、前の店主の時代から数えてですが、創業50年を迎えました。今でも地域の女性達に受け継がれて続いていて、さらに素敵な場として成長しているのは、本当に素晴らしい、私にはとても誇らしいです。東急東横線日吉駅から歩いて十数分の所にあります。ホームページもあるようですので、機会があったら是非ご覧ください¹。

仙台での出会いとご縁

45歳の時に、夫の転勤で今いる仙台市に引っ越してきました。横浜の友人たちと別れて知らない土地に来て、初めは毎日とても寂しい思いをしていましたが、しばらくして色々な所に顔を出して、自分の居場所づくりを始めました。書店での経験を生かし、図書館で活動している読書やストーリーテリングのサークルに近づき、仲間に入れてもらいました。末っ子の中学校でPTA活動に誘われると断らずに引き受けました。また、点字図書館のボランティア募集を見て応募して研修を受け、音訳の活動もしました。それに大学の先輩に誘って頂き、それまで関心がなかったお茶大の同窓会桜蔭会宮城支部にも顔を出すようになりました。もうだいぶ長いこと役員をしています。桜蔭会には立派なお仕事を続けて社会で活躍している方は大勢いらっしゃいますし、転居などの事情で仕事を辞め、地域で子どもの読書のための活動だとか、水や農業を守る環境問題に取り組むといった大変素晴らしい活動をしている先輩方もいらっしゃり、良い刺激をたくさん頂いています。50歳の時に桜蔭会の先輩の推薦で仙台家庭裁判所の調停委員というお役につき、3年前まで20年間務めました。本当にいろいろな出会いやご縁に導かれて、仙台でも寂しくなる暇がないぐらい、様々な事に関わらせてもらいました。

市民による海外協力

私が一番長くかかわってきたのが、シャプラニール＝市民による海外協力の会です。この会はバングラデシュ、ネパールといった南アジアの国々で、近年は日本国内でも活動している、創立50年のいわばNGOの老舗的な市民団体です。私は横浜の本屋での出会いがきっかけで引っ越す2、3年前から会員になっていました。そしてこちらに来てからは、地域連絡会という会員の組織を仙台でも作ることになり、97年に男女数人の会員でシャプラニール仙台・ボンドウの会というのを立ち上げ、仙台独自の活動をしています。当時のメンバーは私以外は仕事を持っている人や大学生でした。一番年上で、家に居るから電話がつながりやすいという理由で私が代表になりました。当時は携帯電話があまり普及していなかったのです。メンバーの都合に合わせて夜や土日に活動することが多くなり、負担にはなりましたが、今までとは違う年代の人々との交流も楽しんでできました。連絡会の代表になってからは、東京のシャプラニール事務所のイベントにも積極的に参加したり、スタディツアーにも参加してバングラデシュに出かけたりで、自分の行動範囲が広がり、さらに多彩な人々との交流が始まりました。最近ではコロナの影響もあり、地域連絡会や私自身の活動は少なくなっていますが、シャプラニールにはできるだけ関わり、ずっと応援して行きたいと思っています。詳しくはぜひウェブサイトをご覧ください²。

これまで、自分の日常生活の中からできることを無理せず、でもちょっとだけ無理して出せる力でやってきたと思います。あれこれ関わりすぎて中途半端だったと思うこともたくさんありますが、その時の人との出会いとか、心に響いたものに近づいて行ったことで、いろいろなことが出来たし、自分の住む世界が広がっていったと思います。

お茶大からもらったもの

お茶大からもらったものという、残念ながらもまでは勉強して得たものは思いつかないのですが、そこで出会った先生方や友達、先輩方からいただいた

た刺激とか好奇心のようなものが、ずっと私の中で育っていったと思います。私はとても恵まれた境遇にいたから、こんな生き方ができたのだと思いますし、その生き方が良かったとは言い切れません。やはり女性も男性もしっかり収入を得て、経済的に自立できる方が良いと思っています。調停委員として離婚問題に向き合っていた中でそう思うことは度々ありました。しかし、どんな境遇にあっても、どんな生き方を選んでも、臆することなく人間関係を作るとか、関心を持ったり必要と感じたことに向かって動くという、そういう力が大事だと思います。それを育ててくれたのがお茶大での学生生活だったとも思えるのです。

私の50年余を振り返っての拙い話にお付き合いいただきありがとうございました。

注

- 1 こどもの本のみせ「ともだち」 <http://tomodachi.d.dooo.jp/>
- 2 シャプラニール＝市民による海外協力の会 <https://www.shaplancer.org/>